

---

## 漱石文学に表われた中東

中 林 隆 明

---

ヨーロッパ人がイスラム教徒に対し、「右手に剣、左手にコーラン」と形容した有名な言葉がある。もとよりこれは誤解と悪意に満ちた表現であるが、中世以来の西欧キリスト教徒が抱いた反イスラム感情をよく象徴している。

ところで漱石の『行人』と言う作品の中に、次のような寓話がある。

向うに見える大きな山を、某月某日を期して自分の足元に呼び寄せる、とマホメットが公言する。当日集合した群衆を前に3度号令したが、山は動く気色がない。そこで、彼は「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では来たくないやうである。山が来て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」、と言って山に歩いて行った。

漱石は『行人』執筆中、3度目の胃潰瘍で倒れた後、最終章「塵勞」を大正2年9月16日から52回「朝日新聞」に連載、同年11月15日に完結した。その第40回に上の「マホメット喚山」と呼ばれる話が出て来る。長野二郎の依頼で旅行に誘ったHが、二郎の兄の一郎に対し説得の材料に使ったものである。しかし、そもそもこの話は『ほとゝぎす』（第2巻2-

3号 明治31年11月-12月）に寄稿した「不言之言」中に言及されており、その中に「ベーコン」の論文中にありしを記憶す」とある。「漱石山房蔵書目録」にある、フランシス・ベーコンの『随想集』（*Bacon's Essays and colours of good and evil*, Edited by W. A. Wright, London, Macmillan, 1872）の第12章「大胆について」には、確かに同一内容の「マホメット喚山」説話がある。もともと『随想集』はベーコンの生前に3版刊行されており、同章が収録されたのは第3版（1625）である。当館所蔵本（1883年版）の注を見ると、その出典は未詳とある。ただし同時に「スペインではよく知られた諺」との説も紹介している。ただ筆者が引用語、諺等の辞典で調べた範囲では、先のベーコンの使用例が最も古いようである。

ここで考えてみたいのは、一体漱石はどこで中東に関する知識を得、また中東を理解したのか、と言う事である。前述の「漱石山房蔵書目録」によってこれを見ると、やはり彼の専門の英文学関係資料を通じて得たものようである。当時の日本は朝野を挙げて、欧米先進国をモデルに必死の近代化路線をまい進していた。このような欧米化政策の中で、中東

地域は英仏など欧州列強の植民地、と言う程度の認識が日本人に一般的だったのは当然かも知れない。またその知識も欧米の文献資料を通して得たものか、1869年開通したばかりのスエズ運河経由の欧州航路の途次の見聞によった（漱石の場合は明治33年10月と35年12月）。このような状況の中で、中東理解の上で特筆に値する日本の出版物として、次の2点がある。

1つは明治9年刊行の『馬哈默伝』（ホンフリー・プリドウ著 林董訳 干河岸貫一刊）で、翻訳ながら日本最初のマホメット伝である。もう1つは明治32年の『<sup>マホメット</sup>麻譚末』（坂本蠡舟（注） 博文館）で、日本人著作としては嚆矢と言えよう。以後明治末期まで、主に<sup>ナカキヤ</sup>忽滑谷快天がマホメット伝を『新仏教』などの雑誌に発表したり、単行書を刊行した。漱石存命中（1867-1916）出版された「伝記」は、筆者の知るところでは11点に過ぎない（『アジア・アフリカ資料通報』18（12）1981掲載の「マホメット関係邦文文献仮目録」参照）。ちなみにイスラムの聖典コーランの最初の邦訳は、前述の坂本蠡舟（注）によって、漱石没後の大正9年『コーラン経 上・下』として、『世界聖典全集』の第14-15巻（世界聖典全集刊行会）に収録された。

最後に、漱石の中東関係用語の使用例を、作品の中から拾ってみると次のようになる。検索ツールとしては、主に『漱石全集 第17巻 索引』（岩波書店 1976）によった。

i) 古代オリエント

トロイ 『トリストラム・シャンデー』（明治30）

二子ヴェ 『同上』

バビロン 『同上』、『小説「エイルキン」の批評』（明治30-32）

ii) アラビア・イスラム

モハメッド 『不言之言』『行人』（明治31-大正2）

モハメッドと剣 『こゝろ』（大正3）

コーラン 『同上』

アラビヤン・ナイト 『創作家の態度』（明治41年）

アラビアンナイト 『新日本画譜の序』（明治43年）

亜拉比亞人 『ホイットマンの詩について』（明治25）

ワード 『日記 明治44年』

アデン 『日記 明治33年』

Babelmandel 『同上』

iii) エジプト

埃及（エジプト） 『吾輩ハ猫デアール』、『幻影の盾』、『虞美人草』、『三四郎』、『ホイットマンの詩について』（明治38-41）

埃及ノ神 『断片 明治38/39』

埃及のマミー 『同上』

埃及の美人 『創作家の態度』（明治41年）

埃及人 『吾輩ハ猫デアール』（明治38-39）

ナイル 「虞美人草」（明治40）

ポートサイド（Port Said） 『創作家の態度』（明治41）、『日記 明治33年』

スエス 『日記 明治33年』

Sinai 『日記 明治33年』

iv) イラン

- 波斯 (ペルシャ) 『文学評論』 (明治 42)  
 ペルシャの壁掛 『幻影の盾』 (明治 38)  
 波斯辺 『同上』 (明治 38)  
 波斯人 『吾輩ハ猫デアル』 (明治 38-39)  
 波斯産の猫 『同上』  
 v) トルコ  
 土耳其 『文学評論』 (明治 42)  
 土耳其の天子 『それから』 (明治 42)  
 vi) ユダヤ  
 猶太人 (ジュウ) 『吾輩ハ猫デア  
 ル』、『幻影の盾』、『虞美人草』、『文  
 学論』、『漱石山房座談』 (明治 38-大  
 正 3)  
 ヘブライ民族 『滑稽文学』 (明治  
 40)  
 希伯来 『文学論』 (明治 40)  
 Judah 『断片 明治 38・39』  
 Israel 「余白」  
 Hebraism 「同上」

以上によって見ると、年代的には明治  
 25年から大正3年に至る期間に書かれ  
 ており、中でも明治38年以降のものが圧  
 倒的である。この期間は漱石が英国留学  
 後、第一高等学校教授、併せて帝国大学  
 文科大学講師に就任した時期から、朝日  
 新聞社員として晩年の充実した作家生活  
 を送っていた時期に相当する。その間修  
 善寺の大患など、病床に臥せることも多  
 かったが、これもいわゆる、留学時代を  
 中心とする彼の30歳代前半期に至る時  
 期に蓄積した知識が、作品の中に結実し

たものと言えるかも知れない。いずれに  
 しても、ゲーテが『西東詩集』に示した  
 ような該博で深い中東認識とは基本的に  
 異なる。これも日本とドイツの、中東と  
 の歴史的かかわりの相違によるものであ  
 るうか。

(注) 『麻譚末』は坂本健、『コーラン  
 経』は坂本健一と、それぞれ著者、訳者  
 の表示がある。『帝国大学一覽 明治  
 31/32年』によると、明治31年7月に  
 「文学部史学科」卒業者氏名の中に「坂  
 本健一」の名が見える。これには本籍地  
 は兵庫県とあるが、前後の状況から考え  
 ると、両者の著訳者であろう。

(なかばやし・たかあき 図書部古典籍  
 課)

# 人行

著石漱目夏

